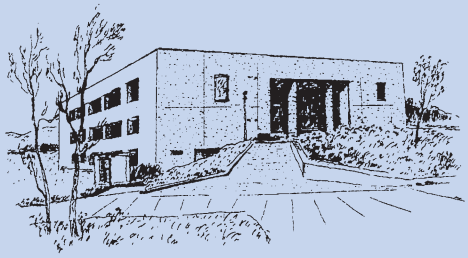
福島大学附属図書館報

書燈



No.45 2010.10.1 発行

〒960－1293　福島市金谷川1番地
TEL（024）548－8087
http：//www.lib.fukushima-u.ac.jp/
携帯電話版
http：//www.lib.fukushima-u.ac.jp/i.htm
福島大学附属図書館

難しいことを易しく…

経済経営学類　菊池　壮蔵

学部学生の時代、自主ゼミ（サブ・ゼミ）では日本の社会科学関連の様々な文献を読んでいた。そのなかに、戦後経済学史分野の古典とされていた内田義彦『経済学の生誕』（1953）があった。その序文の中に、アダム・スミス研究のあり方について「分析（認識）の有効性と実践的有効性との明確な区別」というような一文があり、私はここに妙な引っかかりを感じていた。当時まだ1970年前後の全国学生運動の余韻が残っており、社会の変革と社会科学の認識とが相即不離であるとの「感覚」があったからかもしれない。確か19世紀のマルクスの言葉に「哲学者はこれまで世の中を様々に解釈・説明してきた、しかし肝心なのは解釈することではなく変革することである」というような台詞があり、20歳代の私は、そこに社会科学を学ぶ者にとって「世の中は変え得る」という「希望」の暗示を読みとっていたのだろう。*

そんな中、同じゼミで丸山眞男の文献を読んでいたとき、メンバーのなかでこんな会話があったと記憶している。「丸山さんってすごいねぇ。戦争直後に書かれたものなのに、今でも日本社会の分析に通用するような射程距離を持っている感じがする。今読んでも新鮮だよね。」「でもそれって、30年たっても、丸山さんが分析対象にした日本が本質的に変わってないっていうことじゃないの？」「丸山さんでさえ、現実の日本社に対してほとんど影響力を持ち得なかったってことになるのかなぁ…。」

社会科学の分野で研究者になろうかと思い始めていた当時のこの会話は今なお私が引きずっている問いである。それから10数年ほどたって、「マックス・ヴェーバーの会」という研究会の裏方をしていた頃、この問いを丸山さん本人にじかに問いただすという千載一遇のチャンスに遭遇した（たぶん'92年夏）。丸山さんは一瞬絶句した後、「うーん、そういわれると困っちゃうんだけどなぁ。僕も、福澤のものなんかを読んでいて、近代の日本って何だったんだろうって思っちゃうんだよね。福澤の時から全然変ってないんじゃないのかなんて。」その時は、「あっ、逃げた」とも一瞬思ったのだけれど、社会の現実に対する分析の鋭さというのは、それ自体は社会変革の実践的な力とは必ずしも同じではないという現実も同時に痛感させられた瞬間でもあった。

最近、本館所蔵の『福澤諭吉全集』（大正15年発行の非売品）を借りだしてボチボチ見ているところなのだが、確かに福澤はすごい。ただ者ではないのである。図書館を通じて知り合えば「ただ友」であるが…。一万円札でしか知らない人も、慶應義塾大學の創始者として知っている人も、このさい彼の著作にじかに触れて欲しいと、あらためて思うこのごろなのである。

例えば、福沢諭吉の初期の作品のひとつ『西洋事情』が出版されたのは慶応二年のこと。坂本龍馬はまだ生存しており、大政奉還前年のことだ。その冒頭、「小引」（「まえがき」にあたるもの）の日付が「慶應二年丙寅（かのえとら）七月」となっていることから、第二回目の渡米直前に記されたものである。彼は、安政6年（1860）冬に米国へ、文久元年（1861）冬に欧州へ、慶応2年（1866）冬に米国へと都合三回渡航したと言っているのだが、これらの渡航経

『福澤全集』 全10巻
國民圖書 1925　時事新報社編纂
第3巻より
福澤先生肖影（文久二年露都に於て寫す）
「福澤諭吉」の四字は先生の自著

験は、今日の観光旅行とは随分趣が違う。幕府公用の渡米準備費用数千両を横浜の米国商社に赴いて、外国為替に組んでもらう場面を始めとして、旅行案内としても即役立つ経験・知見を細部に至るまで具体的に記録してくれている（『西洋旅案内』）。「米国に行くのにイングランド銀行のポンド建て為替で大丈夫なのか？」という質問を数時間の説明を受けて完璧に理解し、ほめられたという記述がある。一日がかりで説明を受けたのについに理解できずに頭を抱えて帰った武士もいた時代に、ほんの一瞬で外国為替の仕組みを理解したのだ、彼は。

福澤は、大坂の適塾で蘭学を学び、後に江戸に帰って義塾を開くのだが、横浜港の現場でオランダ語ではなく英語の方が有用であることを実感し、ただちにこれを身につける。早くも安政５年（1860）に、自ら英漢和の辞書『華英通語』を発行している。ライフル銃の操作マニュアル（『雷銃操法』）まで翻訳出版しているのには、開いた口がふさがらない（後日談を紹介する紙幅がないのが残念だが）。ところで、適塾の師匠であった緒方洪庵に対して、江戸で『解体新書』を出版した杉田玄白との洋書翻訳への対極的姿勢について福澤が語っていることは、また実に興味深い。玄白が単語の一字一句にこだわった直訳調の正確さを信条としていたのに対し、洪庵が教えたのは自在な訳で文脈上の正確性や正しい理解に至る方法であったのだという。深遠な知識も、武家流の難しい漢語で訳すような姿勢では理解もされず、また伝わらなければ無意味だという態度だった。福澤はこの姿勢を正しく受け継いでいる。ほとんどのニッポン人がそれまで考えたことすらない、欧米近代の合理的思想、その本質を、わらべにもわかるような形式で精力的に提供し続けたことが、『全集』を読み進むにつれ痛いほど伝わってくる。

さて、先に名をあげた内田義彦さんであるが、彼は晩年に『作品としての社会科学』を世に問うた。1981年のことである。『日本資本主義の思想像』『学問への散策』と並べて、内田＜三部作＞が完成したとされる。'85年２月25日だったか、福島大学で講演していただいた折り、内田さんは開口一番。「本日福島大学へは、教育学部から呼ばれたので来ました。ん…、…経済学部から呼ばれたならば来なかったと思いますが…」などと変な（？）発言を聞いたことが妙に私の記憶に残っている。斯学（しがく：当該学問分野）の事情に詳しい方であれば、微苦笑をさそう発言なのだが、部外者にはなぜ彼がそんな発言をしたかは、理解されなかっただろうと思う。まして、Ｌ教室を埋めた聴衆の学生諸君にとっては、ね。

戦後日本の代表的知識人の一人としておおいなる自負を持っていた彼は、一向に浸透しない「日本の社会科学」一般の成果・到達点を、「読まれる」＝「作品」として提出しようという動機を前面に掲げて世に問うたのだ、と思う。生産財（研究者に向けた学術論文）生産ではなく最終消費財（一般の読者向けの文章）生産が重要だとの旗を掲げたともいえる。その後『読書と社会科学』（岩波新書、1985）によってその「路線」が継承されるのであるが。

むろん、難解なものが「作品」ではないとすれば、ドストエフスキーやマックス・ヴェーバーのものは

どうなるのだ、などという小林昇さん（福島大学名誉教授）からの鋭い突っ込みがあったし、丸山さんに至っては、「日頃、内田さんの論文は読ませる・自ずから＜作品＞のようだと思っていたら、自分でそれを言い出した。まるで、彼女は美人だなぁと遠くから眺めていたら、当人が＜美人としての私＞と名乗り出たみたいな感じがする」という（オフレコ）発言を残しているが。それは、それとして…。

そうこうするなかで、本稿執筆の遅筆に苦しんでいるさなか、'10 年の 9 月 26 日付けの朝日新聞に、画家の安野光雅さんの「難しいことを易しく……」という記事に接した。「難しいことを易しく、易しいことをふかく、ふかいことをおもしろく」という遅筆堂・井上ひさしの残した名言によせて書かれたものなのだが、その記事の冒頭で、鶴見俊輔さんからの引用を知ることになった。

「今日の日本のインテリが社会へのはたらきかけにおいて無力なのは（中略）知識人の思索の根幹を、なすものが、日本の一般市民の思索の根幹となっているものと、ひどくはなれていることからも来ている」「知識人の多くは、社会に対して効果的発言を、することができなくなっている。効果的に発言するための表現手段を、持っていないのだ」とある（「日本の大衆小説」1950 年，『現代教養全集 12・文学の常識』筑摩書房に所収）。

いわゆる結論というものを出したいわけではない。ただ、最後に蛇足をば一言。さる休日の午後に、ぼーっとＴＶを観ていて、番組の最後に北野たけしが言った言葉。カンヌ映画祭に出した『アウトレイジ』の激しい暴力性について、記者から社会に悪影響を与えるのではと質問されたという。たけしは、これまで数多くの人間を感動させる映画が世に出されてきたのに、その影響で世界は良くなったのか？と切り返して、記者が黙ったという。確かに、グゥの音もでないと思う。それはそうだが、そうは言っても、井上ひさしが残した言葉は、やはりモノを書く者は誰もが背負い続けなければならない基本姿勢であるべきなのだろう、と深くため息をつくのだ。

＊『生誕』の本来の主旨はこれとは逆で、近代自由社会の形成に対するスミスの思想的貢献（実践的有効性）と、スミスの理論が資本主義の分析にどこまで有効なのか（分析の有効性）を混同してはいけない、ということである。念のため。

学内教員著作寄贈図書

『ハンドブック学校ソーシャルワーク演習：実践のための手引き』

ミネルヴァ書房　2010.3
門田光司，鈴木庸裕編著

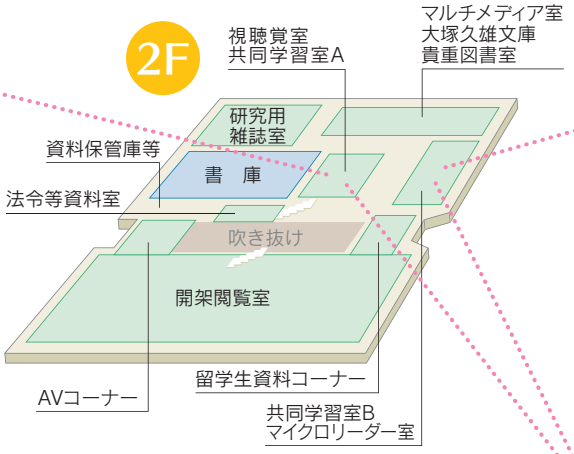
ソーシャルワーカーという言葉はみなさんご存じと思いますが、近年、学校や教育機関に社会福祉士・精神保健福祉士などの福祉職へ任用される時代が到来しました。「スクールソーシャルワーカー」という専門職です。全国の自治体（都道府県・市町村教育委員会）で600名を超える人々が学校における社会福祉サービスや学校と地域の保健・福祉・医療の専門機関との橋渡し、そして子どもの「最善の利益」を保障する「相談援助」業務に就いています。これは 2008年からはじまった文科省の「スクールソーシャルワーカー活用事業」を契機としています。本書は、こうしたスクールソーシャルワーカーの実務者やスクールソーシャルワーカーを目指そうとする学生・院生、学校・家庭・地域のつながりを求める教師や保育士、そして地域で子どもやその家族と関わる保健師や児童相談所などの職員、医療関係者、NPO、市民の方に向け、その実践の実際を、事例を通して学んでもらうために編集されました。

図書館新着情報

2010年4月より館内の施設や設備をリニューアルしました！皆様のご利用をお待ちしています♪

視聴覚室のテレビ/パソコン

テレビはパソコンや持込機器と接続して大型スクリーンとして利用できます。プレゼンの練習やビデオを使った学習に便利。

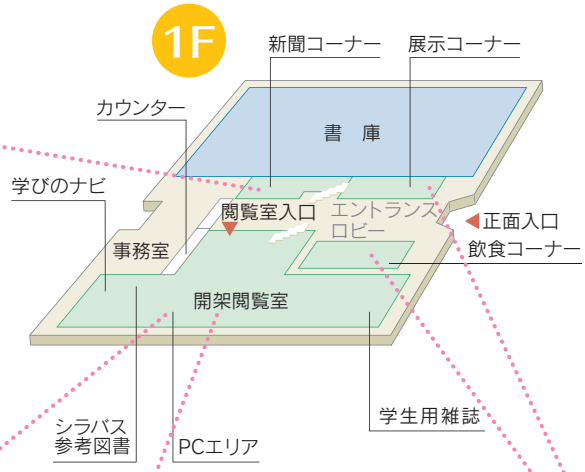


マイクロリーダー

操作が視覚的にわかりやすく、簡単にできるようになりました。

新聞コーナーの照明

明るくなりました。



共同学習室A/Bのパソコン

Windows7がそれぞれ1台あります。利用申込の際に、パソコン利用も申し出て下さい。

PCエリアのパソコン/イス

Windows7が15台、XPが5台入り、長時間作業できるタイプのイスにリニューアル。

鉄筋コンクリート造り3階建		7,218m²
利用者関係		2,545m²
収蔵関係		3,165m²
管理関係その他		1,508m²

情報検索コーナーのパソコン

Windows7が1台、XPが3台にリニューアルしました。

展示/飲食コーナーの照明

消費電力が少なく、寿命が長いLED照明にリニューアル。

こんなものがあったのか!

『華々しき鼻血』

人間発達文化研究科　廣瀬　奈津子

ロバート・サブダの絵本がヒット商品として取り上げられていた時期に、「大人も楽しめる絵本」というコピーが流されていました。なるほど一見子どもの読み物である絵本も改めて手にとってみればまた違った視点で楽しむことができるということなのでしょう。懐かしい記憶の中の絵本といえば、言葉のリズムと上手いのか下手なのかよくわからないイラストの印象がぼんやりと残っている程度のものではないでしょうか。

ポップアップなどの造形的な仕掛けを除けば、大抵の絵本は「文」と「絵」の二つで構成されています。

これを改めて考えてみると、本という様式で展開される文と絵の関係は、双方のいいところで補い合って…と言い切れるほど簡単なものではないように思います。

そもそも「文字」と「絵」はお互いに意思疎通ができるものなのでしょうか。

一枚の絵のすばらしさを文字列では表現しきれないし、何十枚も描き連ねたタブローの作品群でも数文字の言葉に敵わないこともあります。表現領域の異なるこの二つを用いて、書(描)くことで何を表現しようとしているのか、書(描)かないことで何を暗示しようとしているのか…そう考え始めると、もしや絵本の中には何か計算しつくされたトリックがあるのではなどと探りながら読み込むことになります。

「絵を付けていく」という視点でみると、「文」のイメージを視覚化するというのは実はとても複雑な作業です。絵の方向性にも左右されますが、具象を描きこむ瞬間には、複数の三次元的な要求が突きつけられることになります。時刻と光の角度は、少年の着ているシャツの色は、座っている椅子のデザインは…など、本筋に一切関係のない情報が増えていくため、描き込んでいくにつれて「文」の余韻を塗りつぶしてしまうことがあります。これらの問題をどう消化していくかで作家のセンスが問われるのですが、デフォルメを突きつめて似たり寄ったりの絵柄の絵本が書店に並んでいる様子を見ると、どうにも単純に描き崩せばいいという問題でもないようです。

そんな話をされても今さら絵本なんて…と思われる方も多いと思うので、ここで「大人のための絵本作家」といわれるエドワード・ゴーリーの絵本を紹介します。世界的なカルト・アーティストである彼の著書は、執拗に描き込まれたモノクロームの線画と独特の文章と有無を言わせないシュールな作風で(一部では)有名な作品です。

『華々しき鼻血』

河出書房新社　2001.11
エドワード・ゴーリー著
請求記号：726.5/G67h

癖になりそうな言い回しと起承転結のはっきりしない展開で、ページは進んでいきます。

本に意味を求める方にはあまりお勧めできませんが、この「ストーリーを通して伝えたい事は、特にない」というのが、ゴーリー作品の特徴ではないでしょうか。あまりに無意味すぎてかえって何か重大なメッセージが隠されているのではと勘繰ってしまうほどです。人を選ぶ作品が苦手ならば、著書の中では他に「うろんな客」がお勧め。

良い意味でも悪い意味でも絵本のイメージが変わるかもしれません。

子供向け絵本とは趣向を変えて、今から絵本を始めてみるのはいかがでしょうか。

カウンターの内側から

共生システム理工学研究科　2年　加納　功大

私は今年の春から福島大学付属図書館でパート職員として働かせていただくことになりました。図書館は私が学生生活を送ってきた中で授業や研究活動に関する本を借りることしか関わりのない場所であったため、館内にどのような本や施設、サービスがあり、どのような人が利用しているのかなど詳しいことはわかりませんでした。春からカウンター業務に携わらせて頂き、職員の方や先輩方から指導して頂くにつれて、少しずつですが図書館がどのような施設かわかるようになってきました。

館内には授業やゼミ、卒業研究等を行っていく上で非常に便利な、共同学習室や視聴覚室などの学習スペース、新聞閲覧スペース、シラバス参考図書の設置などがあり、他の図書館からの本の相互貸借や文献複写なども利用できます。そして自分自身に新たな価値観や理念、変化、感動を与えてくれる多くの魅力的な本があり、在学生に限らず既卒者や教授、学外者と幅広い利用者の方に利用されています。また、利用者の声を聞くための私書箱の設置や購入希望本の受け付け、館内オリエンテーションなど図書館をより良い施設にしていくための工夫もたくさん行われています。

私は図書館と聞くと少し暗いイメージを持っていましたが、このように福島大学附属図書館はとてもオープンで利用しやすい施設になっています。これまでに来たことがある人もあまり来たことがない人も、ぜひまた図書館に足を踏み入れて学生生活における想像以上の有用性やおもしろさを感じて欲しいと思います。

目　次

- 巻頭言「難しいことを易しく…」……菊池　壮蔵(1)
- 学内教員著作寄贈図書の紹介
  『ハンドブック学校ソーシャルワーク演習：実践のための手引き』……鈴木　庸裕(3)
- 図書館新着情報……利用者サービスチーム(4)
- こんなものがあったのか！『華々しき鼻血』……廣瀬　奈津子(5)
- カウンターの内側から……加納　功大(6)